(A) leaf on the roof スピンオフ #1
「まゆときぬ」

登場人物

村崎白眉（４５）クールでドライな名探偵
葛原キヌ（３９）おっとり探偵助手
桜澤喜十郎（４５）機微のわかる代議士

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

○車内

　白眉とキヌ、フロントガラス越しにアパートを見上げている。
白眉「キヌ。あの雲。繭みたいだね」
キヌ「ハクちゃんどうしたの急に繭なんて」
　カーラジオ。
ラジオ「第６７回 夏の全国高等学校野球選手権大会。やはり今年の注目はＰＬ学園のＫＫコンビでしょう」
白眉「キヌ。今のＫＫコンビってのは？」
キヌ「桑田と清原」
白眉「頭文字か。二人の役職は？」
キヌ「桑田がピッチャー。清原はバッター」
白眉「ふーん。で？ ピッチャーとバッターはどっちが足速いんだい？」
キヌ「あのさハクちゃん。探偵仕事以外のことにも少しは興味持ったら？」
白眉「事件解決に必要なら持つよ。でも、そもそも必要な情報は全部キヌの頭ん中にあるんだ。それでいいだろ」
キヌ「私が（いなくなったら？）」
白眉「ん？ どうしたキヌ」
キヌ「ううん。なんでもない。ねぇ。ハクちゃん。この事件いろいろ変じゃない？」
白眉「最初からさ。お宅の商品に毒を仕込んだ。金を出さないともっとやる。そう言って洋菓子会社を脅迫。現金を要求する」
キヌ「なのに指定された場所に行ってもお金を取りに来る気配がちっともない」
白眉「今回ようやっと近くに来た。どれだけ用心深いヤツなのかと思ったら」
キヌ「私たちに尾行されてるのも張り込みされてるのも気付かない お間抜けさん」
白眉「そんなヤツが こんな大事件の筋を書いた犯人 かい人にじゅう七面相なのか」
キヌ「全然 想像してた犯人じゃない」
白眉「キヌは どう考えてる？」
キヌ「うーん。きっと犯人は複数犯のグループ。ここに住んでるお間抜けさんは仲間じゃなくて使いっ走り。捨て駒さん」
白眉「は！ 捨て駒。いい言葉知ってるじゃないか」
キヌ「やめてよ。あと。目的もお金じゃ。少なくとも手前のお金じゃない」
白眉「手前の金じゃない。じゃあ狙いは？」
キヌ「株の空売りだよ。差額で儲ける」
白眉「株の空売り。なんだいそりゃ？」
キヌ「例えばハクちゃんが私から本を借りて誰かに５００円で売る。儲けは？」
白眉「５００円。でもキヌが本 返せって言ってきたらどうするんだい？」
キヌ「古本屋で１００円になってる同じ本を買って私に返す。残るのは？」
白眉「４００円。けっこうな額だ」
キヌ「簡単に言うと これが空売りで儲ける仕組みなんだけど。ただ この方法には絶対に必要な条件があって」
白眉「返すころには本の価値が５００円から１００円になってること。なるほどね」
キヌ「そう。そのための毒入り洋菓子騒動。こうすれば犯人は現金の受け渡し場所に行く。なんて危ない橋を渡る必要がない」

白眉「間抜けから詳しいことは聞けないだろうね。ただ確実に犯人グループに近づく」
キヌ「うーん。地道だね」
白眉「地道に確実に だよ。探偵仕事は」
ラジオ「バントの構え。ここは確実に送っていきたいところ」
キヌ「あの。さ。ハクちゃん」
白眉「キヌ。辞めんのかい？ 探偵仕事」
　金属バットの快音。
　歓声とどよめき。
ラジオ「打ってきたー！」
キヌ「え。と」
白眉「次の依頼は長野のでっかい養蚕農家から。遺産相続に絡んで人死にがあるかもしれないから来てくれってヤツだ」
キヌ「ようさん。あ。さっきの繭って」
白眉「ドロドロの家族。双子の相続候補。わらべうた。過去の因縁。腕が鳴るよ」
キヌ「そうだねハクちゃん。私も」
白眉「でもキヌ。あんたは依頼の手紙を読んですらなかった」
キヌ「そんなことない」
白眉「一度読んだもんは絶対に忘れないあんたが私の言った繭って言葉に反応しなかったのがその証」
　ラジオから応援合戦。
白眉「キヌ。あんた。辞める気だね？」
　ラジオから応援合戦。
キヌ「家のこと。全然できてないし」
白眉「女だって外で働く時代だよ。今度そういう法律だってできるらしいじゃないか」
キヌ「危なすぎるでしょ？ この仕事って」
白眉「それは確かに。だけどねキヌ」
キヌ「私だけならいい。でも」
白眉「こんなに毎日ドキドキできる楽しい仕事 他にないよ」
キヌ「子ども。大事にしたい」
　ラジオから応援合戦。
白眉「痛いところを突くじゃないか」
キヌ「ごめんハクちゃん。でも今回は特に思って。だってほら。脅迫の電話」
白眉「ああ。どれも子どもの声だったね」
キヌ「どこの子かわかってない子もいる。無事なのかも。もしウチの子が巻き込まれてたらって思ったら。だから」
白眉「赤線連続放火事件。初めて二人で解決した事件だ」
キヌ「やめてよハクちゃん。今そんな話」
白眉「国産ロケット詐欺事件。チ‐37号偽札事件。瑞希ちゃん誘拐事件」
キヌ「（話題を変えたい）あ。誘拐事件の時だよね。桜澤さんと初めて会ったの。まだ記者さんだった」
白眉「三億円事件。外交省機密漏洩事件。マンダレーハイジャック事件」
キヌ「ハイジャックの時も桜澤さんいたよね外に。今や立派な代議士先生。こないだご馳走になったフルコースもすごかったね」
白眉「キヌ。あんたがいないと解決できなかった事件だらけだ」
キヌ「そんなこと」
白眉「なんて言うと思ったかい」
キヌ「え？ ハクちゃん？」
白眉「なにがフルコースだ。洲崎の。赤線の隅で腹減らしてくたばりそうになってたあんたを拾ってやったのは誰だい？」
キヌ「いや。感謝してるよ。でも」
白眉「誘拐事件の時だって へっぴり腰でなんにもできなかったじゃないか」
キヌ「違う。逃げ道確保してたんだよ」
白眉「そのときのへっぽこ巡査と結婚するって聞いたときは驚かされたね」
キヌ「へっぽこって。和夫さん優しいから」
白眉「あいつはダメだ。最低の警官だよ」
キヌ「そこまで言わなくても」
白眉「あいつが警官辞めて実家の古本屋を継いだのだけは正解だったね」
キヌ「ハクちゃん。いい加減に」
白眉「あれが警察にいたら いい面汚し」

キヌ、白眉を平手打ち。
キヌ「私のことはいい。でも和夫さんのことは悪く言わないで。ハクちゃんみたいに強い人ばっかりじゃないんだよ」
白眉「つよい？（キヌ。あんたは私を強い人間だと思っているんだね）」
キヌ「ハクちゃん？」
白眉「仕舞いだね」
キヌ「え」
白眉「ここまでだ。私とあんたは」
キヌ「ハクちゃん。ごめん。でも」
白眉「行きな。二度と顔見せんじゃないよ」
キヌ「（白眉が悪役を演じてくれていると気づき）ハクちゃんのバカ」
キヌ、出ていく。
白眉、腕で両目（涙）を隠す。
ノック。
白眉、ひとつ息をつき、窓を開ける。
白眉「キヌ。もう話すことなんて」
桜澤、顔を出す。
白眉「さくらざわ」
桜澤「1分で済む」
白眉「桜澤。どうしてここがわかった？」
桜澤「偶然 通りかかっただけだ。だが ちょうどよかった。この件はここまででいい。骨折り感謝する。謝礼はいつもの倍だ」
白眉「なるほど。犯人グループにいくらか渡して手打ちにしたってことだね」
桜澤「国民の不安を取り除くことこそが我々公僕の務めだ」
白眉「は！ 論説委員の前で同じこと言ってみな。いい病院紹介してくれるよ」
桜澤「こらえてくれ。私もこらえた」
白眉「無理だね」
桜澤「（去っていくキヌの背中を見て）今後報酬はひとり分でいいのか？」
白眉「二人分働く」
桜澤「白眉ならできそうだ」
白眉「次 名前で呼んだら刺す」
桜澤「繭から絹を作るとき。中にいる蚕ごと茹でる。蚕が繭を出るときに繊維を切るからだ。繭と絹は残酷な共犯者と言える」
白眉「詳しいね」
桜澤「ひと昔前まで養蚕は国策だった」
白眉「で？ なにが言いたい」
桜澤「悪縁ほど切れづらい」
白眉「は！ 詩人だね」
桜澤「邪魔をした（行きかける）」
白眉「なぁ桜澤」
桜澤「なんだ？」
白眉「あんた、いつか本。そうだな。回顧録出しな。私も出す。あいつの店に置いてもらおう」
桜澤「悪くない案だ」
桜澤、微笑み、去る。
白眉、桜澤が消えるまで見送るとクラクションを鳴らし、慟哭を隠す。

〈おわり〉